

「おすそわけ」による マイクロコミュニティ創出の実践

前田 博子・*吉村 正照

(2020年3月2日受理)

Practice of creating micro-communities through sharing

Hiroko MAEDA・Masateru YOSHIMURA

1. はじめに

本研究は、仁愛女子短期大学共同研究『地域のアートコミュニティ創出に向けた調査研究』の実践報告である。

2. 背景と目的

公益財団法人日本デザイン振興会が運営するグッドデザイン賞において、2018年にめがねフェス¹⁾、2019年にはRENEW²⁾といった福井県内のイベントが受賞をしている。それぞれのイベントの2019年の来場者数は、めがねフェスは17,600人³⁾、RENEWは28,000人⁴⁾であり、ともに伝統工芸を通して地域の魅力を伝えることに成功している。こういったイベントに加え、山・海といった豊かな自然が身近にあり、福井県には多様な楽しみ方ができる環境が整っている。だが、本学をはじめとする福井県内大学生の多くが「福井には遊ぶところがない」と言う。休日になると地元を離れ県外のテーマパークやショッピングモールなどで余暇を楽しんでいる。自由な時間をアルバイトに費やし、そこで得たお金は「モノ」「コト」の消費者として県外に落としていることになる。一方で、「近くの川を見にいく」「とにかく散歩」といった対極的な遊び方をブログ記事『限界貧困でもできる遊び、初級編』⁵⁾において

紹介している筆者のはましゃかは以下のように述べている。

大学時代、お金のかからない遊び方をめちやくちや教え込まれてしまったせいで、卒業して2年経つ現在も無料の遊戯で満足する日々が続いてしまっている。こんなにお金がないのに、すぐ旅行ができないこと以外は無限に楽しい。楽しい日々。なぜだ。日常が、美しい

学生時代に知った時間の使い方が、その後の生き方において大きな影響を与えていることがわかる。福井県内大学生の多くが卒業後に地元に残ることを前提とするならば、このような多様で創造的な考え方がこれまで以上に広まって良いはずである。そこで「マイクロコミュニティ」を創出することにより、学生たちが能動的に社会との関わりを築きながら、消費者ではなく生産者として地域の課題解決や価値創造に志向していくことを目指す。なお、本稿ではマイクロコミュニティを次のように定義する。

1. 2人以上10人以下の集団
2. 集団の中に「勤め先や学校」「居住地」「興味関心」といった属性を共有する他者が1人以

*仁愛大学人間学部

上いる

具体的には「友だちの友だちとご近所さん」というような集団で、「その中に知っている人は誰かいいる」という状況が発生している。

3. 方法とこれまでの実践

マイクロコミュニティの創出にあたっては、筆者らがともに実践してきた「おすそわけ」を主軸とすることにした。両者共通の思考として、人が集うことから新たなコミュニティが形成され、その繋がりが人々を支える活動となり得ると考えている。

3-1 これまでの実践：吉村の場合

2011年、当時担当していた授業資料をウェブ上に公開した⁶⁾。やがてGoogleの検索上位に表示されるようになり、SNSを調べると他大学の学生にも利用されていることがわかった。特定の学生のために公開したものが見知らぬ誰かの役に立つという現象が起こった。これは現代的な「おすそわけ」といえるであろう。ウェブにおけるおすそわけには次のような特徴がある。情報の公開にあたって経費をまったくかけないことが可能であり、更にどんなに配っても量が減ることはない。Googleのようなサーチエンジンを介して、不特定多数の世界中の人々を対象にすることができる。一方で、どのような反応が起こっているかは、アクセス解析やSNSを参照することからある程度は調査できるが、具体的にはわかりにくいという側面もある。こういった経験が、昔ながらのおすそわけに興味を持つ動機となり、その後の活動へと繋がっていく。2016年にオフィス兼セカンドハウスのヒュッテナナナが完成すると、ここを拠点として地域のまち歩きイベント「もりたシャルソン」の運営協力やマイクロシアターサービス popcorn を利用した定員が10名以下の映画会を実施している⁷⁾。2017年のもりたシャルソンでは、知人から食べきれずに残っていたそうめんを譲り受け、流しそうめんを企画した。参加者の多くから「前からこの建築に興味があったんです」と話しかけられ、おすそわけがコミュニケーションの潤滑油になりうることを確認することができた。



図1 流しそうめんの様子

3-2 これまでの実践：前田の場合

人々が繋がるための仕組みとして2017年に『enter あなたとわたしのつながるプロジェクト』⁸⁾を企画実施、これは在學生と卒業生、そして学年の異なる卒業生と卒業生をつなげるためのプロジェクトである。2019年にはこれまでの活動をまとめた個展『engagen - 衣服が記憶するわたしたちの過ぎた時間 -』⁹⁾を開催している。engagenで発表した2作品《見知らぬ女性がのこした空》《見知らぬ女性からのおすそわけ》は、空き家に残された大量の布・衣類から制作してある。《見知らぬ女性がのこした空》(図2)は遺された多くの布を繋げて彼女が住んでいた地域で広げ、その後、人々が集う場で広げるといった所有の移行を示したものである。また《見知らぬ女性からのおすそわけ》(図3)は使いきれなかった布や衣服をおすそわけとして他者に渡すことをおこなっている。一人で抱えきれないものは、他者に委ね、所有を譲る。このことから捨てられるはずのものの可能性を持続させる効果を持つと考えようになった。故繊維と呼ばれるものが市場に入り、見知らぬ人から見知らぬ人へ渡っていたことを鑑みれば、頂戴した衣服や布をおすそわけすることは文化形成の礎となると考えた。人と物との関係から小さな関係性が生まれ、その関係性を他者にわけていくことで所有を譲り、物のこれからを委ねてゆくことが可能であると確信する。営利目的ではなく、わけられるものを無理なくわけていく仕組みは元来の地域コミュニティを形成していた。加えて物だけでなく、知識や学びなどもわけてゆくことが

可能である。自身の利益を優先するものづくりとは異なるコミュニティ形成において「おすそわけ」は最適である。



図2 《見知らぬ女性がのこした空》



図3 《見知らぬ女性からのおすそわけ》

映画『聖者たちの食卓』¹⁰⁾によれば、毎日10万食が巡礼者や旅行者のために、すべて無料で提供されている。これとの違いは大規模であるか小規模であるかということである。共通した社会での認識の違いによって規模の大きさが変わってゆくのかかもしれない。

4. 調査研究

4-1 石巻工房

石巻工房は2011年の東日本大震災を機に宮城県石巻市でデザイナーを中心に市民工房として設立され、震災後の復旧・復興のために自由に使える公共的な施設としてスタートした¹¹⁾。トラフ建築設計事務所がデザインした「AAツール」はこのブランドの代表作である。26×87mmのデッキ材だけで

できた組み合わせ可能なツールで、そのバリエーションは小さなコミュニティを生み出すポテンシャルを秘めている。2019年9月に「石巻工房」を訪れ、工房見学や代表の千葉隆博氏から話をうかがうことができた。印象的だったのは「自分たちでできることを自分でやろう」という言葉であった。決して大きな力や素晴らしい考えを実践してゆくのではなく、自身の力、労力に合った小さなことを能動的に実践することで誰かの力になれるということである。またDIYの実施では「何かあった時に役立つ道具の使い方や想像力を企てる力を身につけてもらいたい。直せることを知っていれば直すことができる」これは今日的にわたしたちの暮らしが人任せな暮らしになっていることを示唆するものである。経験の欠如は想像力の欠如につながってゆくことを話を伺いながら共感した。



図4 石巻工房

4-2 Reborn-Art Festival 2019

石巻工房の訪問後、翌日までの2日間に渡って宮城県の複数の市町（石巻市、塩竈市、東松島市、松島町、女川町）で開催されていた芸術祭「Reborn-Art Festival 2019」を巡った。そのステートメント¹²⁾では次のように述べられている。

お祭りの中心地となる牡鹿半島には、人の手の加えられていない自然が多く残されています。そこには津波の傷跡とともに、人の営みと豊かな海と山と森があり、そのまんなかに『Reborn-Art』のお祭りが出現します。ここを訪れる皆さんが、地域の

人々やアーティストやスタッフと一緒に
なってお祭りをつくりだすとき、ほんとう
の意味で地域が前に向かって進んでいくた
めのエネルギーが生まれてくるはずです。

ここで促されているのは、備えられたアートを鑑賞・体験するだけの「消費的な行動」ではなく、地元の人々と能動的に交流することで何かを生み出していく「生産的な活動」である。これは筆者らが目指しているマイクロコミュニティでの活動と共通した背景・目的であり、よって現地の方とはできるだけ積極的に交流するようにした。宿泊先や会場ボランティアの方からは東日本大震災時の現地の様子や復興のプロセスを教えていただいた。また、鮎川エリアには会場時間の30分前に訪問したにもかかわらず、地域のボランティアスタッフの柔軟な対応により作品を鑑賞することができた。一方で他のエリアにおいても時間外に鑑賞をしているグループがあったが、「関係者なので特別に許可している」という理由で筆者らは案内役の方に断られた。ルール上は当然の対応であろうが、それでは従来の美術館と変わりがない。例えば「はるばる福井から来られたのですね、ぜひ一緒にください」とするのがステートメントでも述べられていた「祭」であるのではないかと考える。また、青葉市子の作品『時報』は、住民からの要請により発表から数日で公開停止となっていた。これらの課題は筆者らの実践においても参考となった。



図5 地元の方に話を聴いている様子

5. 実践研究

5-1 もりたシャルソン2019、森田文化祭

本イベントの数ヶ月前から準備を開始した。2019年6月、越前市在住の知人から梅をおすそわけしてもらえることになり、筆者らで収穫を行った。バケツ2杯分の梅を持ち帰り、生活デザイン専攻の有志学生3名とともに梅ジュース、梅味噌、梅干しを作成した。これらのうち、「梅ジュース」をもりたシャルソン、森田文化祭でふるまうことにした。作業途中、各家での梅仕事についての対話から家庭というコミュニティから他者とのコミュニティへ移行してゆく様子が垣間見れた。「ちょっとお母さんに聞いてみるね」と母親に質問メールを送り、返信が返ってくる。返ってきた情報を共有するといった、個の情報を共有し、それらを組み合わせながら、新たなルールや方法（具体的には砂糖の種類、塩の量、梅の掃除の仕方など）を模索できることがわかった。



図6 梅ジュースをつくる様子

また、ヒュッテナナナの畑で収穫したものから「しそジュース」と「フライドポテト」をふるまうことにした。材料となるしその葉とじゃがいもは畑で自生していたため、主となる原材料費は0円である。じゃがいもは数年前に老女性に開放していた場所から育ったものであり、「もとを辿るとあそこのおばあさんからのおすそわけなんですよ」というエピソードにふれることで交流を深めることもできた。

卒業研究の実践の場を探していた生活デザイン専攻6名も本イベントに参加した。自身のキャラクターをベースとした似顔絵を無料でふるまった田端

桃子の「みんなもここになれる似顔絵屋」プロジェクトが特に人気となり、多くの参加者と交流していた。この森田での活動を踏まえた田端は自発的に他の人々が集う場への考察として、福井駅前でのイベントやRENEWなど福井県内外問わず「場巡り人巡り」を行った。そのことは他学生にも影響を与えた特筆すべき事例である。他の学生も自身の課題を発見する機会となり、2ヶ月後の森田文化祭では個々の得意分野を生かした「チーム」としての活動に成長していた。これはコミュニティが学生間のコラボレーションを促進していると考えられる。



図7 もりたシャルソンにおける学生たちの交流の様子

学びを共にしてきた学生と共に、もりたシャルソン及び森田文化祭へ参加したことは、各自の得意を見出しながら互いを支え合うような研究となり、一人ひとりの学びを互いに分け合うこととなった。またこれは異なった知識や技能を持った人が集まることで共異体として協働できることをわたしたちに教えてくれた活動となった。学生が一生懸命作った屋台を歩道が整備されていない道中も屋台を押して歩く。当たり前のことながら、小さな穴、凹凸があればどうしてもそこでつまずいてしまうし、完璧な屋台ではないので中に入れた荷物が落ちこちてしまう、そんなハプニングもプロセスとして組み込んでいけることを時間を通して学修している。地域コミュニティの中で女の子が大きな屋台を押して歩いている姿は、地域の人から「頑張れよ」という言葉をかけてもらえるようなこともあり、地域の中での役割が見えた気がした。たくさんの物を多く運ぼうとすれば大きな車を借りて全て乗せて運んでしまえ

ば楽なものだが、あえて押す、あえて歩くと言うことをわざわざやったからこそ経験から学び得た事が多かったと学生一人ひとりが実感していた。そして二度に渡って森田で活動したからこそ、前回のイベントでの出品者としての認知があり、潤滑なコミュニケーションを生んでいたと考えられる。

またここで得た利益^[註1]の行方を学生のみで相談し、売上げの1/4は自身の収入に、さらに1/4は屋台制作者（岡崎）への屋台レンタル料に、残りの1/2は共通のパーティー（パーティ）費用（共有財産）として共有できる仕組みを提案し、実践していた。彼女たちが開催するパーティー（パーティ）とは月に1～2回開かれるものである。大それたものではなく、マイクロコミュニティ程度の小さな規模で昼休み時間内に開かれるものである。ここでも互いに持ち寄った物・知識をおすそわけする仕組みが実践され、良い連鎖が生まれていた。

卒業研究を終えて、屋台を制作した岡崎杏海は次のように述べている。

屋台や椅子を作っていく中で、また新たな廃材がゴミとして出てしまうことがわかりました。また、屋台や椅子など、作り終わってから反省点が多く出てくることもあり、制作する段階でコンセプトをよく考えて深めることが大切だと知りました。そして何よりも、思っていた以上にものづくりの難しさを感じました。難しいと感じ、行き詰まった際、祖父や父に手伝ってもらい一緒に作業をする事がありました。仕事があまり無く最近作業をしていなかった祖父が、今回の研究で手伝ってくれる際、とても嬉しそうに私まで嬉しくなりました。アミズのもの自体は、不恰好でクオリティーが高いわけでもなく、価値があるのかと言われたらないのかもしれませんが、しかし、廃材や廃棄物を他の何かに変えたい、という廃材から始まった活動、今まで同じゼミ生のみんなや先生方、家族と一緒に活動してきたことに価値があると気づきました。

アミズを使った活動で、人の役に立てたかもしれないと思える研究にもなり、沢山の人と繋がる事ができた研究にもなりました¹³⁾。

岡崎のようにマイクロコミュニティの活動を通して、家族との関係を振り返る学生がほとんどであった。これはマイクロコミュニティ創出の実践を通して、身近なコミュニティを振り返り、コミュニティのあり方を問い直すきっかけとなった。また、田端桃子も次のように述べている。

見つめ直して気付いたこと。好きの趣くままに進んでいったかのように思えた私でしたが、企ておこなったこと、見て感じたことは、すべて次の行動に繋がっているように思えます。先ほどの#ももこの場巡りのように、人の集う場で出会った人の中には、次の行動に繋げてくださった方々がいました。一歩外に出てみると地元でも知らないことばかりだと気づきます。自ら発信してみると反応してくださり、導いてくださる人がいます。私は場所のおかげで人と繋がる事ができています。また、私には仁短という場所があったから一歩踏み出す為の機会を知り、応援して下さる環境のおかげで活動範囲がより広まり、人の輪を大きくする事ができました。途中登場しましたこのような画像はももこのInstagramで投稿していたものです。似顔絵を始めるにあたって開設したのですが、企業の方からお仕事の依頼を頂いたりインスタで初めてももこを知ってくれた方がいてもこの可能性を信じたいと思えた出来事でした。もしかしたら「ももこ」が私の大好きな福井にとって重宝される存在になるかもしれない。これからの話をするると、全て夢のような話になってしまいますが、福井駅周辺に新しい人との繋がりができたことも仁短入学時の私にとっては夢のような話でした。続ければ道は拓けてゆく。その経験

を忘れず夢を現実に行きたいです¹⁴⁾。

これらは共異体による協働の学びとして次学年にも引き継いで欲しいと願うものとなった。

5-2 OSSU!

2020年2月に今年度の活動のふりかえりを兼ねて開催を企画した。イベント名は挨拶の「押忍」と「おすそわけ」を組み合わせて「OSSU!」と名付けた。おすそわけを日々のカジュアルな挨拶のように行える場でありたいという意味がこめられている。残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2月末に予定していた本イベントの開催を中止することとなった。しかし、このような事態の時こそ、コミュニティの中での役割が問われていると感じた。わたしたちのこれからの暮らしを考える際、社会が想定外の事態になったときでも、わたしたちに出来ることを自ら考え能動的に動ける力が必要である。人任せの生活に慣れてしまっているわたしたちには今後の大きな課題として残ることとなった。

6. まとめ

わたしたちが体験してみたいことを主とし、受け身の姿勢ではなく、能動的余白を残したイベントを企画実施したことによって、彼女たちの学生時代にわかった時間の使い方が、その後の働き方・生き方において大きな影響を与えていくはずである。それらのことも踏まえて以下のことがわかった。

- 「おすそわけ」はコミュニケーションのきっかけを生み出す
- 「おすそわけ」はコミュニティの持続性を高める
- 「おすそわけ」は参加者の能動性を高める

これらを踏まえて、「消費的な行動」ではなく、地元の人々と能動的に交流することで何かを生み出していく「生産的な活動」を今後も引き続き継続してゆきたいと考えている。

近隣の人たちが体験してみたいことを主とし、受け身の姿勢ではなく、能動的余白を残したイベントを企画実施する。「祭り」や「イベント」は賑わいが必要であるが、集客による賑わいを排除した、個人の満足度を優先する「コト」を企てたい。

註

- 1 学びのおすそわけと題した研究であったため、金儲けを優先しない研究であったが、利益の有無を検証するため、もりたシャルソンでは無償、森田文化祭では有償としている。

引用・参考文献

- 1) めがねフェス [めがねフェス] | 受賞対象一覧 | Good Design Award, <https://www.g-mark.org/award/describe/48280> (2020年2月28日閲覧)
- 2) 産業観光イベント [RENEW] | 受賞対象一覧 | Good Design Award, <https://www.g-mark.org/award/describe/49760> (2020年2月28日閲覧)
- 3) めがねフェス公式Twitter, <https://twitter.com/meganefes/status/1141197716288000000> (2020年2月28日閲覧)
- 4) ローカル×ローカルvol.06 いいものって、なんだろう？～TSUGI代表 新山直広さんを招いて～ | イッテツ | note, <https://note.com/murasakitotetsu/n/ncab51a658c60> (2020年2月28日閲覧)
- 5) 限界貧困でもできる遊び、初級編 | はましゃか | note, <https://note.com/shakachang/n/nd9e412217f31> (2020年2月28日閲覧)
- 6) Processing 学習ノート, <https://d-improvement.jp/learning/processing/> (2020年2月28日閲覧)
- 7) ヒュッテナナナ, <https://d-improvement.jp/huttenanana/> (2020年2月28日閲覧)
- 8) 前田博子, 「県内学生等の定着推進事業 en-ter あなたとわたしのつながるプロジェクト活動報告」, 仁愛女子短期大学研究紀要題49号, pp.1-5 (2017)
- 9) 前田博子, 「衣服を介して口伝される衣文化の成り立ちと仕組みの考察」, 仁愛女子短期大学研究紀要題51号, pp.9-21 (2019)
- 10) フィリップ・ウィチユス&ヴァレリー・ベルト, 『聖者たちの食卓』原題: Himself He Cooks (2011)
- 11) トラフ建築設計事務所, 『インサイド・アウト』, pp.360-384 (2016)
- 12) Reborn-Art Festival 2019, <https://www.reborn-art-fes.jp/> (2020年2月28日閲覧)
- 13) 岡崎杏海, 「アミズ -廃棄物を活かした屋台制作-」, 仁愛女子短期大学卒業研究発表会発表者原稿ま (2020)
- 14) 田端桃子, 「モモ・バシヨ・ヒト-ももこによる人の集う場の考察-」, 仁愛女子短期大学卒業研究発表会発表者原稿ま (2020)